

国連防災  
世界会議  
イベント

# ぼうさい探検隊 フォーラム 報告書

～防災教育のあり方を考える～



社団法人 日本損害保険協会



# ぼうさい探検隊フォーラム

## 防災教育のあり方を考える



## はじめに

日本損害保険協会では、防災教育活動の一環として、子どもたちがまち中を探検し、自ら防災や防犯の施設や設備を発見し、マップにまとめる実践的防災教育プログラムである「ぼうさい探検隊」\*活動をすすめています。「ぼうさい探検隊フォーラム」は、「ぼうさい探検隊」活動を通して防災教育について、ともに考えてもらうことを目的として実施しました。このフォーラムを機会として、皆様の安全・防災に対する意識の更なる向上をお願いするとともに、今後もより一層地域の安全防災活動に取り組んでいただければ幸いです。

\*「ぼうさい探検隊」の概要は巻末に掲載しています。

## 開催要項

### 日時

2005年1月19日(水) 14:00~17:10(13:30開場)

### 会場

神戸国際会議場 301会議室

### 主催

社団法人日本損害保険協会/朝日新聞社/ユネスコ/  
特定非営利活動法人 日本災害救援ボランティアネットワーク

### 後援

内閣府/総務省消防庁/文部科学省/警察庁/  
全国都道府県教育委員会連合会/アジア防災センター/兵庫県

## もくじ

■ プログラム	2
■ フォーラムダイジェスト	4
■ 開会挨拶	8
■ 第1部 ぼうさい探検隊活動の紹介	9
■ 第2部 ぼうさい探検隊マップコンクール表彰式	12
■ 第3部 パネルディスカッション	16
■ 閉会挨拶	28
アンケート結果	29
日本損害保険協会の安全・防災事業の主な10項目	30
資料 「ぼうさい探検隊」とは	31

14:00 開会挨拶 平野 浩志 (社団法人 日本損害保険協会会長)

## 第1部

## ぼうさい探検隊活動の紹介

ビデオ映像により、地震や津波災害など各地域の災害特性にあわせて行われた全国各地の「ぼうさい探検隊」活動を紹介します。また、高知県浦戸小学校の先生、児童から取り組んだ感想を伺いました。

14:05 <ぼうさい探検隊活動の紹介>  
宮城県仙台市立若林小学校  
兵庫県西宮市鳴尾校区子ども会  
東京都新宿区早稲田商店会と大学生  
高知県高知市立浦戸小学校  
<実施校へのインタビュー>  
高知県高知市立浦戸小学校  
市川校長先生、児童代表

第1部の詳しい内容は **9** ページをご覧ください。

## 第2部

## 小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール表彰式

2004年度に実施した「小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール」に全国96の小学校から478作品もの応募がありました。審査の結果、入選作品のうち5作品の表彰と子どもたちから「喜びの声」をいただきました。

14:40 審査員長 室崎 益輝 氏 (独立行政法人 消防研究所理事長)

### 文部科学大臣賞

埼玉県加須市立不動岡小学校「おまかせ不動っ子探検隊」  
プレゼンター 文部科学省スポーツ・青少年局体育官 戸田 芳雄 氏

### 防災担当大臣賞

和歌山県美浜町立松原小学校「浜ノ瀬チーム」  
プレゼンター 内閣府防災統括官付企画官 丸谷 浩明 氏

### まちのぼうさいキッズ賞 (ユネスコ)

京都府京都市立第四錦林小学校「吉田見守り新聞」  
プレゼンター ユネスコ事務局長 松浦 晃一郎 氏

### 未来へのまちづくり賞 (朝日新聞社賞)

愛知県田原市立赤羽根小学校「赤小ぼうさいキッズ」  
プレゼンター 朝日新聞大阪本社編集局長 田仲 拓二 氏

### ぼうさい探検隊賞 (日本損害保険協会賞)

宮城県石巻市立湊小学校「はちまんあるある探検隊」  
プレゼンター 日本損害保険協会会長 平野 浩志

※「」内はチーム名

第2部の詳しい内容は **12** ページをご覧ください。

15:20 休憩 (10分)

## 第3部

# パネルディスカッション

災害、戦争、犯罪など、あすの日本、あすの世界を担う子どもたちを取り巻く環境はとてつもない状況です。子どもの安全・安心を守るために学校で、家庭で、地域社会で私たちは何をすべきか様々な体験、事例をもとにメッセージを送りました。

15:30 テーマ 防災教育「学ぶ・伝える～安心社会へのメッセージ」

### コーディネーター



むろさき よしてる  
室崎 益輝 氏

独立行政法人 消防研究所理事長、神戸大学名誉教授。中央防災会議専門委員、国土審議会特別委員などを歴任。

### パネリスト



あつみ ともひで  
渥美 公秀 氏

大阪大学大学院助教授、日本災害救援ボランティアネットワーク理事。新潟県中越地震などの被災地救援に従事。



バダウィ・ルーバン 氏

ユネスコ自然科学局防災課長。防災の国際戦略を監督する「国連機関間防災特別対策チーム」のユネスコ代表。



アグネス・チャン 氏

歌手・エッセイスト・教育学博士。「ひなげしの花」で日本デビュー。日本ユニセフ協会大使、目白大学客員教授。



きっかわ としこ  
吉川 肇子 氏

慶応大学助教授。シミュレーション&ゲーミング学会、日本リスク研究学会に所属。著書に「リスクとつきあう」など。

第3部の詳しい内容は **16** ページをご覧ください。

17:00 閉会挨拶 朝日新聞大阪本社編集局長 田仲 拓二 氏

17:10 閉会

### 司会

からたに ゆか  
柄谷 友香 氏

京都大学大学院助手。京大防災研究所助手、阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」専任研究員を経て現職。



# DIGEST

## 開会挨拶（要旨）

1

主催者代表 平野 浩志  
(社団法人 日本損害保険協会会長)



平野 浩志 日本損害保険協会会長

- 損保業界は、災害発生に対して迅速に保険金をお支払いすることで復旧のお役に立てるに努めている。また、同時にかねてから防災対策の大切さを痛感している。
- 防災対策は、世代を超えて受け継がれるべき財産。次の世代を担う子どもたちにしっかりと受け継がせていきたい。
- 損保協会では、約1年前から、本格的に実践的防災教育プログラムである「ぼうさい探検隊活動」を推進しており、今回その集大成としてフォーラムを実施する。

## 第1部 ぼうさい探検隊活動の紹介

2



真剣に取り組んだ活動を紹介

- ビデオ映像によって、宮城県仙台市、兵庫県西宮市、東京都新宿区、高知県高知市における実際のぼうさい探検隊活動やマップ作成の様相を紹介。
- さらに、南海地震に備えた津波対策をテーマに「ぼうさい探検隊」に取り組んだ高知県高知市立浦戸小学校の代表児童・校長先生から感想を伺った。

### 市川校長先生の話

- 海のすぐ近くにある学校なので、津波から子どもたちの命を守るにはどうすればいいかを課題に取り組んできた。
- 具体的には、「総合的な学習の時間」で、4つの地域ごとに防災マップを作り避難場所や子どもたちの提案で浦戸の自慢を書き込んだ。
- 子どもたちは、今回のスマトラ島沖地震のニュースを見て、自分たちは防災の学習をして津波や地震の恐ろしさを知って良かったと答えた。
- 頭にたたき込む学習より、体験学習を中心に行っているが、「ぼうさい探検隊」をやって本当に良かったと思っている。

FORUM ALBUM

熱心に話を聞く参加者たち



ぼうさい探検隊の活動がビデオ映像で紹介された



## 3

### 第2部 ぼうさい探検隊マップコンクール 表彰式

■ 全国96の小学校から478作品もの応募があった「小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール」について、文部科学大臣賞、防災担当大臣賞、ユネスコ賞など入選5作品を表彰するとともに、子どもたちに受賞の喜びをインタビューした。

#### 受賞作品

##### 文部科学大臣賞

防災教育に対する学習意欲が感じられ、かつ、仲間との協調性が感じられる作品  
入選チーム：「おまかせ不動っ子探検隊」(埼玉県加須市立不動岡小学校)

##### 防災担当大臣賞

地域の防災意識向上につながり、地域住民の防災対策に役立つ作品  
入選チーム：「浜ノ瀬チーム」(和歌山県美浜町立松原小学校)

##### まちのぼうさいキッズ賞 (ユネスコ特別表彰)

地域の状況を細かく取材し、子どもたちによる独自の提案が見られる作品  
入選チーム：「吉田見守り新聞」(京都府京都市立第四錦林小学校)

##### 未来へのまちづくり賞 (朝日新聞社賞)

地域の特色やぼうさいに関する情報が第三者にも分かりやすく表現されている作品  
入選チーム：「赤小ぼうさいキッズ」(愛知県田原市立赤羽根小学校)

##### ぼうさい探検隊賞 (日本損害保険協会賞)

地域の人々とのつながりや安全・安心への意識の高まりが感じられる作品  
入選チーム：「はちまんあるある探検隊」(宮城県石巻市立湊小学校)



受賞校への表彰



入選校代表児童へ喜びのインタビュー

#### 子どもたちの喜びの声

- 受賞の知らせを聞いてとてもうれしかった。みんなも「良かったね」と言ってくれた。
- 「浜ノ瀬」を探検して、いろんなものを探したり発見することが楽しかった。もう1つは、地震で真っ暗になったとき、みんなが安全に逃げられるように誘導灯の設置・ソーラーシンボルタワーを作って欲しいと提言したことが面白かった。
- 海が近いので津波を心配してたけど、高台ということがわかって安心した。
- 1時間以上まちを探検したので、みんなとても疲れたけど、地域防犯連絡所のおじさんが「笹かまぼこ」をくれてみんなが食べながら探検したことが楽しかった。
- 「ぼうさい探検隊」をやって、地域で100人以上の人が見守ってくださっていることを知り、びっくりしたけどとてもうれしかった。学校へ行くのも安全で安心です。

#### 室崎審査員長の審査総評(要旨)

- 応募いただいたすべての作品は素晴らしかった。感想も含めて3点お話ししたい。



室崎審査員長の講評

1つは、子どもたちの非常に素直で純粋な目は素晴らしいこと。いろいろな発見、気づきなどこの活動を通じて子どもたちは大きく変わっていった。2つめは、大人と子どもの伝え合いがいろいろな形で生まれたこと。防災は伝え合いだと思う。3つめは、子どもの頑張りの裏に、多くの保護者やボランティア、地域の人たちの協力があること。この活動によって地域が一つにまとまったと言える。どのマップからも以上の3つが読み取れた。

- この活動が日本だけでなく世界中に広がっていくことを心より願っている。

## ユネスコに子どもたちからメッセージと千羽鶴を贈呈

- 受賞校の代表児童は、表彰式前日の懇親会で、スマトラ島沖地震による津波の被災者に対してメッセージを寄せ書きするとともに祈りをこめて千羽鶴を折り、ユネスコの松浦事務局長に贈呈した。



千羽鶴を受け取る松浦事務局長

## ユネスコ・松浦事務局長の挨拶（要旨）

ユネスコ特別表彰のプレゼンターをつとめられた松浦事務局長からは、「インド洋津波を見ても、防災教育の重要性は論を待たない。最も進んでいる日本の防災教育を全世界に広めていく必要がある」とのご発言をいただいた。

- 日本は、防災対策においても防災教育においても世界の最先端であると確信している。「ぼうさい探検隊」のような取り組みを世界各国でやってほしい。
- スマトラ島沖地震でも多くの方が亡くなったが、このような防災教育、防災対策をしっかりしていなかったことが大きな要因でもある。
- ぜひ引き続き日本の各地で防災教育、防災訓練にしっかり取り組んでほしい。また、世界にも広げる努力をしていただきたい。ユネスコとしてもこれからもっと訴えていきたいと思っている。



ユネスコ・松浦事務局長の挨拶

## 4

### 第3部 パネルディスカッション



パネリストたちによって熱いディスカッションが行われた

- テーマ：防災教育「学ぶ・伝える～安心社会へのメッセージ」
- コーディネーター  
室崎 益輝氏（独立行政法人 消防研究所理事長）
- パネリスト  
渥美 公秀氏（大阪大学大学院助教授）  
バダウィ・ルーバン氏（ユネスコ自然科学局防災課長）  
アグネス・チャン氏（歌手・エッセイスト、教育学博士）  
吉川 肇子氏（慶応大学助教授）



# 「ぼうさい探検隊フォーラム」要旨



コーディネーターの室崎 益輝氏



パネリストの渥美 公秀氏と吉川 肇子氏



パネリストのバダウィ・ルーバン氏と  
アグネス・チャン氏

## 主な発言内容

- 我々の責任は子どもたちの将来に危険をばらまかせないこと。日本の防災教育の経験を世界に発信すべき。それが国際協力の第一歩。
- 災害で一番犠牲になるのは子どもたち。子どもの生存・保護・カウンセリング等がユニセフの目標。
- 子どもたちに「防災」といっても、なかなか分からない。楽しみながら続けられる「ぼうさい探検隊」を開発。
- 「ぼうさい探検隊」は、子どもを介して大人も学べる。子どもが大人の先生になることがあればいい。
- 子どもには保護・援助すべき側面と、次の防災の担い手としての側面がある。その鍵が教育にある。
- いろいろな教育が防災にかかわっている。大阪には、地域と家庭が一緒になった「教育コミュニティづくり」がある。
- 防災プログラムは地域の状況に合わせないといけない。防災資料・パンフレットがあっても発展途上国では、読み書きのできない子どももいる。
- インド洋の津波警報システムも、教育がなければ意味がない。各地の特徴、文化を勘案し、国民全員の感性を高める必要がある。
- 防災の人材活用では、国連に任せるのではなく、日本が世界のリーダーになるべき。
- 子どもを中心にした国際的組織や、プログラムを神戸から、日本から具体化していきたい。

## フォーラム全体を通して

- ① 防災教育は不可欠であり、子どもに楽しみながら学んでもらえる「ぼうさい探検隊」はユニークですばらしいプログラムであるとの評価をいただいた。
  - ② 関東大震災、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震等、これまでに起こった日本の災害の経験、反省を日本国内だけでなく、世界の防災に役立てていくべきとのご意見をいただいた。
- 日本損害保険協会では、この「ぼうさい探検隊」をさらに普及していくこととしており、そのため、2005年度は応募対象を学校に限らず、地域の子ども会等へも拡大して「ぼうさい探検隊マップコンクール」を実施し、併せてフォーラムを行うこととしている。

以上

## 開 会 挨拶

日本損害保険協会会長  
平野 浩志

皆様、こんにちは。日本損害保険協会の平野でございます。主催者の1人としてご挨拶を申し上げます。まず、本日このように多くの方々に、この「ぼうさい探検隊フォーラム」にお集まりいただきましたことに、厚く御礼を申し上げます。

さて昨年、多くの自然災害が、日本のみならず世界中に多大な被害をもたらしました。新潟県中越地震はもとより、史上最多の上陸となりました台風、年末のスマトラ島沖大地震によるインド洋津波の被害等々、不慮の自然災害により、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された多くの方々に心からお見舞いを申し上げます。また1日も早く復旧されることを心より願っております。

私ども日本損害保険協会は、災害の発生に対しまして迅速に保険金をお支払いすることで、復旧のお役に立つよう努めているとともに、また同時に、かねてから災害の発生に備える防災対策の大切さを痛感いたしております。一方で、「災害は忘れたころにやってくる」という例えもありますように、私たち一人一人が防災に対する意識を持ち続けることの難しさも感じております。

防災対策は、世代を越えて受け継がれるべき財産、英知だと認識しております。防災は人々の意識から、それも次の世代を担う子どもたちから始めようと、私たち日本損害保険協会はこの「ぼうさい探検隊活動」を推進しております。

この「ぼうさい探検隊」は、子どもたちが自分の住んでいるまちを探検して防災マップをつくり、それをご指導いただく先生、父兄、ボランティアなど地域の方々が支えるという、まさに地域ぐるみの防災教育でございます。過去に大きな災害を経験された地域におきましては、それを先人がどのように乗り越えていったかを学んで、今後に生かしていく機会でもあります。

本格的な取り組みを始めてから1年たちました。本日はその集大成ということで、全国各地の活動のご紹介、それからマップコンクールの表彰、そしてパネルディスカッションを予定しております。この活動にご賛同いただき、惜しみないご協力を賜りました政府機関、関係団体の皆様方、それにマップコンクールにご参加いただきました生徒、並びに学校関係の皆様、そして本日この会場にお見えいただきました皆様すべてに改めて御礼を申し上げたいと思います。そして本日のフォーラムが、防災意識の高揚に向けた2005年度のよいスタートになるように祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございます。

# 全国各地に広まる「ぼうさい探検隊」

## 第1部 ぼうさい探検隊 活動の紹介



### 〈ぼうさい探検隊活動の紹介〉

次の全国各地で取り組まれた「ぼうさい探検隊」活動を約20分のビデオ映像にて紹介した。

- (1) 宮城県仙台市立若林小学校～宮城県沖地震に備えて
- (2) 兵庫県西宮市鳴尾校区子ども会～リーダー養成と防災キャンプ
- (3) 東京都新宿区早稲田商店会、大学生～地域の連携と防災キャンプ
- (4) 高知県高知市立浦戸小学校～津波災害に備えて

### 〈ぼうさい探検隊実施校へのインタビュー〉

実施校：高知市立浦戸小学校 市川 典子校長先生、岡崎 綾佳さん、  
西口 留美子さん

司会：柄谷 友香氏（京都大学大学院助手）

司会の柄谷氏から浦戸小学校の代表児童ならびに市川校長先生にインタビューを行った。

インタビューの内容は次の通り。

**柄谷** 「ぼうさい探検隊」の活動をご覧いただきました。

いかがでしたでしょうか。子どもたちの生き生きとした表情が印象的であったと思います。このように「ぼうさい探検隊」は、いろいろな形で全国各地に広まっています。本日はただいまご覧いただいた映像にも登場した高知市立浦戸小学校の岡崎 綾佳さん、西口 留美子さん、そして市川 典子校長先生にお越しいただいています。皆さん、ステージにお上がり下さい。



司会  
京都大学大学院助手  
柄谷 友香氏



活動を発表する浦戸小学校の代表児童

## 地域の大人を巻き込んだ活動を展開

**柄谷** それではお話を伺います。まず岡崎さん、住んでいる浦戸地区の自然災害の中で何が一番怖いと思いますか。

**岡崎** 特に台風と津波が一番怖いと思います。

**柄谷** 高知県は毎年、台風被害が発生してますね。浦戸小学校ではもうずっと「ぼうさい探検隊」の取り組みを続けていますが、取り組んでみて楽しかったなと思うことはどんなことですか。

**岡崎** サバイバル合宿というのですが、家が壊れて帰れなくなったことを想定して避難場所で生活する学習が一番楽しかったです。大人が考えるのでは

なくて5、6年生が考えた避難訓練なのでとても勉強になりました。

**柄谷** まさに楽しみながら続けていけるということもこの「ぼうさい探検隊」のよさかもしれないですね。

西口さん、映像にもありましたが、地域の大人たちはこういった形で皆さんの活動に協力してくれましたか。

**西口** 「ぼうさい探検隊」で地域を回ったとき、私たちのインタビューに答えてくれたことと、マップづくりのときに何回も見に来てくれたことです。昔の津波の話をいろいろしてくれました。

**柄谷** 子どもたちが活動することによって地域の大人たちを巻き込めるのだと感じます。

それから浦戸小学校では、さらにこの「防災マップ」を観光用の地図にしたということですが、できればはどうですか。

## 防災マップに浦戸の自慢を加えて観光マップに

**西口** この中にはまちの自慢を書き添えて、観光客の人たちも楽しんで見てもらえると思います。

**柄谷** ありがとうございます。海がきれいなところは沢山の人が観光に来ますものね。役立つといいですね。

市川校長先生、まず地域の災害の特徴をお話いただけますか。

**市川** 海のすぐ近くにある学校ですので、地震で津波が起きるということは、大分前から言われておりました。40パーセントの確率で南海地震が起きるとか、最近は50パーセントとも言われています。私たちは「地震が起きると津波だ」ということで、津波から子どもたちの命を守るためにはどのようにすればいいのかということ課題にしています。

**柄谷** 揺れを感じたらすぐに逃げることが重要ですね。では、この「ぼうさい探検隊」に取り組むことになった、もしくはこれまでやってこられた防災への取り組み、そのきっかけを教えてくださいませんか。

**市川** 平成12年から開かれた学校づくり推進委員会の中で、「これから総合的な学習の時間が始まるが、子どもたちに何を教えていきたいか、また学校にどういう取り組みをしてもらいたいか」について地域の方々から話を聞きました。その際、地震や津波のことを子どもたちに教えて欲しいという話があり、平成14年度に「総合的な学習の時間」が始まった際、自分たちでどんなことができるか考えました。

これは1回目の地図です。表は歴史マップ、裏は生活科のマップで子どもたちがつくりました。この中には、子どもたちがどこにいてもあそこへ逃げたらいいということがわかる避難場所を入れようと、まず地図をつくりました。次に自主防災組織の方々は、津波検討委員会という名前に変えて学校にも協力してくれまして、このマップをどんどん改良していこうということになりました。

これは1枚ですので、見ただけではなかなか場所がわかりにくい。そこで、4つの地域ごとに大きく作ろうということになりました。子どもたちと話し合った時、「せっかく作るんやけ、浦戸の自慢をしようや」ということが子どもたちの方から出てきました。どこを自慢するかは話し合っ、写真を入れていきました。



全員で浦戸の防災マップを説明

また、漫画家の“やなせ たかし”さんが防災キャラクターをつくってくれましたので、各地区にキャラクターを入れました。キャラクターの裏を見ると文字が入っています。その文字をそろえると、「揺れたら逃げる」という言葉になります。この地図を使って、普段の学習の中で子どもたちを連れて一緒に歩くことにしています。

**柄谷** こういうマップは、成果物そのものよりも子どもさん、先生、地域の方々とやっていく過程が面白くて、また重要なのだと感じますね。

では先生、最後に伺いますが、実施して大変なご苦労もあると思いますが、良かったと思うことはどんなことですか。

## やっけていて良かった防災学習

**市川** 私たちが最初にやったことは、防災対策課の方、自主防災組織の方と私だけしか知らない突然の避難訓練をしたことです。狭い部屋の中に沢山のスモークをたいて逃げ道をふさいだりしました。煙で前も後ろも見えず、「子どもはいるだろうか。いや、困った、見えん」という状態なので、防火ドアを開けて前へ出たらいいいの、それとも前が危ないから後ろへ行ったらいいのかもわかりません。子どもたちは先生を頼りにして「先生、どこへ行こう、見えん」と騒ぎます。こういう訓練をやった結果、教員の中から「子どもたちを本格的に育てよう」という声が出ました。

防災教育を初めて1年たったとき、生活科の全国大会で岡崎さんが「あなたは1年間防災の学習をしてどうでしたか」と聞かれて、「私はこんなに恐ろしいことを知るんだったらやらん方がよかった」と答えたのです。「やってよかった」と答えるとばかり思っていましたので、私はすごくびっくりしました。でも考えてみると、知ったら怖いのが津波や地震だと思うのです。それをはっきり自分の言葉で言えたのはすごいと思いました。

今、岡崎さんは防災学習2年目ですが、ここに来る前に「やっぱり綾佳さん、やらなかったらよかったと思う？」と聞きましたら、「やっぱりやってよかった」と言ったのです。「どうして」と聞いたら、「スマトラの地震を見たときに、知っちゃってよかったと思った。知らなかったら逃げないかもしれない」と言いました。

頭にたたき込む学習はしていません。サバイバル合宿など身体でやることが中心ですが、子どもたちはいろいろ考えているのだということがわかって、やってよかったと思っています。

**柄谷** ありがとうございます。私が浦戸小学校に伺ったときには、生徒さんよりも先生の方がいきいき取り組んでいらっしゃる気がして、すごいパワーだなと思いました。

それから今並んでびっくりしたのですが、私が行ったときには、綾佳ちゃん、もっと小さかったですよね。華奢で小さい女の子という印象でしたが、小さいときからこのマップを通じて勉強することによって、大人になって災害に遭うようなことがあっても、きっと活躍してくれると感じています。本当にありがとうございました。浦戸小学校の皆さんでした。

こういった形で皆さんが力をあわせてつくった地図。地元の方や観光に来てくれた人たちにも役立っていくといいですね。以上、ぼうさい探検隊活動のご紹介でした。



「防災学習をやった良かった」と市川校長

# ぼうさい探検隊の成果を発表！安全な地域づくりへ

## 第2部

### ぼうさい探検隊マップ コンクール表彰式



■ 2004年6月から11月まで募集した「小学生の“ぼうさい探検隊”マップコンクール」について表彰を行った。表彰にあたって、

- (1) 室崎審査員長から選考経過の説明
  - (2) 各賞受賞校への賞状等贈呈
  - (3) 作品総評、記念撮影
- を行った。

### 選考経過説明

審査員長 室崎 益輝氏

## 応募作品すべてが素晴らしい作品

皆さん、こんにちは。消防研究所の室崎です。この表彰式に至るまでの選考経過を報告したいと思います。この「ぼうさい探検隊マップコンクール」は、日本損害保険協会、朝日新聞社、ユネスコ、日本災害救援ボランティアネットワークの4者の共催で行われています。

まず応募状況ですが、関係省庁をはじめ、全国の教育委員会にも多大なご協力をいただいて、昨年6月から11月まで募集を行いました。その結果96校から478作品と非常に多数の応募があり、中には海外からの応募もありました。

マップをつくった子どもたちにとっては、自分たちの作品が一番いいはずだと思います。それは間違いなことだと思います。それぞれの思いや一生懸命つくった汗がしみこんだマップです。それをどれがいいかと優劣をつけることはほとんど不可能に近いことですが、コンクールですから、「ああ、ここがいいな」ということを皆で話し合っただけで選ばせていただいたとご理解下さい。今日出席されていない学校の作品にも素晴らしいものがあると考えて下さい。

## 4つの評価基準で選考

評価基準の1つ目は「テーマ性」です。いいテーマを取り上げているかどうか。2つ目は「ビジュアル性」で、見た目ではと非常にきれいだとか、華やかだとか、よくわかるという面。3つ目が「提案性」で、安全なまちをつくるために、子どもたちがどんな提案をしているか。4番目が「教育効果性」で、その中で子どもたちがどれだけ災害に強くなったか、どれだけ効果があったか。以上4つの評価基準で事務局審査、予備審査、本審査と3段階の審査をしました。

最後の本審査は私が審査員長ですが、文部科学省、内閣府、朝日新聞社、日本損害保険協会からそれぞれ代表の方に審査員に加わっていただきました。また本日司会をされている柄谷さん、それから後のシンポジウムに登場される大阪大学大学院の渥美先生の7名で審査しました。



「全て優劣がつけがたかった」と  
審査員長の室崎氏

## 入賞校への表彰

審査は先ほどの4つの評価基準に従って行いました。非常にすばらしい作品が沢山ありましたが、入賞作品8作品のうち、特別賞を除く5作品について表彰式を行います。以上簡単ですが選考経過についてご報告いたします。

各賞の受賞校はつぎの通りである。

■ **文部科学大臣賞**：防災教育に対する学習意欲が感じられ、かつ、仲間との協調性が感じられる作品に与えられるもの。

受賞校：埼玉県加須市立不動岡小学校「おまかせ不動っ子探検隊」

プレゼンター：文部科学省スポーツ・青少年局体育官 戸田 芳雄 氏

■ **防災担当大臣賞**：地域の防災意識向上につながり、地域住民の防災対策に役立つ作品に与えられるもの。

受賞校：和歌山県美浜町立松原小学校「浜ノ瀬チーム」

プレゼンター：内閣府防災統括官付企画官 丸谷 浩明 氏

■ **まちのぼうさいキッズ賞（ユネスコ提供）**：地域の情報を細かく取材し、子どもたちによる独自の提案が見られる作品に贈られるもの。

受賞校：京都府京都市立第四錦林小学校「吉田見守り新聞」

プレゼンター：ユネスコ事務局長 松浦 晃一郎 氏

■ **未来へのまちづくり賞（朝日新聞社賞）**：地域の特色や防災に関する情報が第三者にも分かりやすく表現されている作品に与えられるもの。

受賞校：愛知県田原市立赤羽根小学校「赤小ぼうさいキッズ」

プレゼンター：朝日新聞大阪本社編集局長 田仲 拓二 氏

■ **ぼうさい探検隊賞（日本損害保険協会賞）**：地域の人々とのつながりや安全・安心への意識の高まりが感じられる作品に与えられるもの。

受賞校：宮城県石巻市立湊小学校「はちまんあるある探検隊」

プレゼンター：日本損害保険協会会長 平野 浩志

■ 表彰に先立ち、ユネスコの松浦 晃一郎事務局長にご挨拶を頂いた。内容は次のとおりである。

## ユネスコ 松浦事務局長の 挨拶要旨



「日本の防災教育は世界の最先端にある」と  
松浦氏

## 日本は防災教育の最先端

ユネスコはパリに本部がある国連の専門機関で、教育、文化、科学、そしてコミュニケーションを担当しております。私自身、日本は防災対策においても、防災教育においても、世界の最先端にあると確信しており、かねてから、日本のようなことを世界各国でやってほしいと思っていました。先ほどからいろいろお聞きしていると、日本では、小学校の段階から徹底した防災教育、防災訓練をしているので、非常にうれしく思っています。

ご承知のように、インド洋の大津波で18万人以上の方が亡くなり、かつ何百万人もの被災者を出していますが、一言で言えばこの「ぼうさい探検隊」のような防災教育、防災訓練、そして全般的な防災対策が行われていなかったことが最大の原因です。もちろん技術的に言えば、津波警報がなかったということではありますが、津波が発生して2時間、3時間たっても何の対策も打たれていないし、最初の大きな波が来て潮が引いたら魚や貝があるということで、海岸に出てみんなが拾いに行くというような対応だったことが、これだけの大きな被害を出した原因です。先ほどもお話が出ていましたが、日本であれば、津波

という意識を常に持っていますから、そういうことはあり得ないわけで、日頃から防災教育、防災対策を練っているわけです。

インド洋で津波が最後にあったのは1883年で、同じくインドネシアの火山噴火によって起こりました。もう120年前になります。記録によれば、当時でも3万6000人が亡くなっています。ですからしっかりした研究をしていれば、いずれインド洋でもまた津波があるということで、しっかり対策を練らなければいけないということが分かったと思います。実はユネスコも旗を振っていましたが、旗の振り方が足りなかったと、今になって私も反省しています。今日は日本で「ぼうさい探検隊」という非常に徹底した防災教育、防災対策の具体例を伺って非常にうれしく思っています。

## 日本の防災教育を世界に広げてほしい

ぜひ引き続き日本の各地で防災教育、防災訓練をしっかりやっていただきたいと思います。同時に日本でやっておられることを、世界の各地に広げる努力をしていただきたい、ぜひ教えていただきたいと思います。私は今まで150カ国くらい訪問していろいろな小学校を見ましたが、「ぼうさい探検隊」のような防災教育、防災訓練をやっている小学校は、あまりないのではないかと思います。まさに潜在的な危険のあるところでは、ぜひ日本がやっているようなことをやっていただきたいと思っています。日本の例を踏まえて、ユネスコもこれからもっと旗を振りたいと思っています。

### 入賞者喜びの声



「ぼうさい探検隊」は面白かった



入賞者へのインタビュー

#### ■ 埼玉県不動岡小学校 岡安 優希 さん

この話を先生から聞いたときにとてもびっくりしましたが、とてもうれしかったです。私がみんなにそのことを言ったら、みんなもよかったねと教えてくださいました。

#### ■ 和歌山県松原小学校 谷 剛志 くん

「浜ノ瀬」を探検して、いろんなものを探したり数えたりすることが面白かったです。また、地震で真っ暗になったとき、みんなが安全に逃げられるように誘導灯の設置やソーラーシンボルタワーをつくって欲しいと提言した。

#### ■ 京都府第四錦林小学校 諸永 あすか さん

クラスで調べたり、校長先生にインタビューしたところや、見守って下さっている方が100人以上いると知ってびっくりしました。とてもうれしかったです、学校へ行くのも安全で安心です。

#### ■ 愛知県赤羽根小学校 山本 華穂 さん

海が近いので津波を心配してたけど、高台ということが分かって安心しました。

#### ■ 宮城県湊小学校 蟻坂 みどり さん

まちを探検したときに、地域防犯連絡所のおじさんが「笹かまぼこ」をくれて、みんなで食べながら歩いたことが楽しかったです。

表彰状の贈呈後、スマトラ島沖地震の被災者を励ますために、表彰式に出席した子どもたちや保護者、先生、損害保険協会の職員とで作った寄せ書きと千羽鶴をユネスコの松浦事務局長に手渡しました。



## 審査員特別賞の 紹介

## 審査総評

審査員長 室崎 益輝氏



「ぼうさい探検隊の取り組みが  
世界に広がることを願う」と室崎氏

### ■受賞校：兵庫県神戸市立御蔵小学校「みくらトゥエンティチーム」

受賞理由：震災後10日目の町の様子と復興しつつある今などをまとめた作品で、アイデアも、表現力も高く評価された。

### ■受賞校：京都府京都市立白川小学校「白川キッズあんぜんたい」

受賞理由：小学校2年生という低学年のチームながら、子どもらしい発見や、地図を作成するにあたっての様々な工夫が評価された。

### ■受賞校：岐阜県下呂市立総島小学校「ハッピーチーム」

受賞理由：「猿やいのししに注意」など、この地域ならではの情報がまとめられており、地域の特徴がよくわかる点が評価された。

先ほども申し上げましたが、すべての作品がすばらしかったということをも  
ず確認させていただきたいと思います。

それから私の感想を含めて、マップの審査を通じて見えてきたことを3つお  
話したいと思います。

1つは、子どもの非常に素直で純粋な目はすばらしいということです。私たち  
が気づかない発見がたくさん出てきています。子どもたちの気づき、発見に  
私たちは非常に驚いたというのが素直な感想で、探検隊活動の中で子どもたちは、  
大きく変わっていったと思います。

2つ目は、大人と子どもの伝え合いが、いろいろな形で行われているという  
ことです。マップを見ても、どこのおじさんがこう言ったとか、おじさんから  
こんなことを聞いたとか、いろいろな形でその地域の大人たちが昔の話や今の  
話を伝えていきます。防災とは、伝え合いだと私は思います。そういうことが広  
く伝わっていく、伝え合いのつながりが大きな力になっていくと思いました。

3つ目にあげたいことは、子どもたちが頑張りましたが、マップを見ていると、  
その裏に大人の顔が見えたり、先生の顔が見えたり、それから若いボランティ  
アの顔が見えてきたことです。探検隊活動によって子どもが軸になって地域が  
1つにまとまった、地域の防災活動が子どもを軸に展開されるという、すばら  
しい形がそこに見えてきたと思います。

この3つは、審査したどのマップからも感じられたことです。この「ぼうさ  
い探検隊マップコンクール」をやって本当によかったと思っています。

最後に、このマップコンクールを行うにあたって、何よりもコンクールに応  
募してくれた子どもたちに感謝したいと思います。同時に、学校の先生方のご  
協力、ご支援、また地域の方々の応援に対してもお礼を申し上げたいと思いま  
す。さらには、子どもたちの安全を守りながらマップをつくるために手伝ってく  
れたボランティアの若い学生の皆さんに心からお礼を申し上げたいと思いま  
す。

この「ぼうさい探検隊」が日本だけではなく世界中に広がって、災害に強い  
子どもたちがたくましく育っていくことが、人々が安心できる地球をつくるこ  
とになると思います。この取り組みが世界中に広がることを願って、私の講評  
のまとめにしたいと思います。

# 防災教育「学ぶ・伝える～安心社会へのメッセージ」

## 第3部

### パネルディスカッション

#### コーディネーター

室崎 益輝氏

独立行政法人  
消防研究所理事長



#### パネリスト

渥美 公秀氏

大阪大学大学院  
助教授



バダウィ・  
ルーバン氏

ユネスコ自然科学局  
防災課長



アグネス・  
チャン氏

歌手  
エッセイスト  
教育学博士



吉川 肇子氏

慶応大学  
助教授



防災教育「学ぶ・伝える～安心社会へのメッセージ」をテーマに、5名のパネリストを迎えパネルディスカッションを行った。

#### はじめに

室崎 ただいまから、防災教育「学ぶ・伝える～安心社会へのメッセージ」というタイトルで、パネルディスカッションを開催します。子どもたちを中心に災害に向き合う力、防災の力をどのようにつくっていくか、議論したいと思います。

最初に、自己紹介も兼ねて、子どもと災害、あるいは子どもと防災について、それぞれの思いや考えをお聞きしたいと思います。まずルーバンさん、お願いします。



コーディネーターの室崎 益輝氏

## 子どもの防災教育を共有することが重要

ルーバン 国際連合には「持続可能な開発」という最近つくられた言葉があります。今日の社会は、開発を通して自分たちのニーズを満足させていますが、将来の世代がこのニーズを損なってはならないという発想です。したがって、今日我々が負っている責任は、将来の世代に渡ると同時に、今日子どもたちをも危険にさらしてはいけないということです。

子どもたちは、日々の行動を通して、我々大人とつき合っていく中で、いわゆる防災文化を学んでいきますが、日本はこの分野で非常に経験を積んでいると思います。その子どもに対する防災教育、防災意識の植えつけ方を、ぜひ世界に発信していただきたい。国際協力を考えると、なんとと言っても、お互いの子どもの防災教育の経験を共有することがまず第一歩だと思います。

室崎 持続可能な社会、本当に安心できる社会をつくる上で、非常に大切な存在である子どもたちにどう教育をしていくか、教育の体験を世界で共有したいというお話でした。続いてアグネスさんに伺いたいと思います。

## 子どもを最優先に考える理念で活動

アグネス 私は98年から日本ユニセフ協会の大使を務めています。ユニセフは「チャイルド・ファースト」、何事も子どもたちを最優先に考えるという理念で活動しています。

世界中で人災や天災が起きていますが、一番犠牲になるのはいつも子どもです。

例えば今回、スマトラ島沖で起きた大地震、津波による犠牲者は16万人を超えています。人口の割合から言えば、3分の1とか4分の1が子どものはずですが、犠牲者の半分以上が子どもたちなのです。国連は津波によって500万人が家や家族を失ったりして被災者になっていると見ていますが、ユニセフはその3分の1、155万人の子どもたちが被災していると考えています。被災地域は津波に対する知識があまりなかったということで、「津波」という言葉を聞いたことがない子が多かったと思います。

国連もユニセフも、このような大規模な津波災害は初めてだったので、これからの課題として子どもたちに自然災害に対する知識を広めていかなければならないと思っています。

ユニセフは4つの目標を掲げています。

1つは、生き残った子どもたちが元気に育ってほしいということです。そのために、食べ物、シェルター、着る物、安全な水の提供、そして衛生確保のためにトイレを設置したり、石けんを配ったり、予防接種をしたりします。一番弱い母親や5歳以下の子どもたちに栄養食やビタミン剤を配ったりします。

ユニセフは子どもたちの目線でものを見ますから、そのようなプログラムがすぐ始まりますが、ユニセフが活動していない先進国などでは、子どもたちのためだけのスタッフがいるかどうか疑問です。でも子どもを最優先に考えれば、家族も助かるし、全体的な衛生状況もよくなります。いろいろな戦災地や被災地での体験によって、一番弱い者を守れば、実は大人たちも守られるということ、ユニセフは信じています。

次の目標は、子どもたちを保護することです。はぐれた子どもたちを親元、あるいは親戚などに戻します。1人だけの子どもは、例えば人身売買のターゲットになったり、あるいは誘拐されたり、性的な搾取ややりきれない大人の怒りの暴力のターゲットになる懸念があります。それで子どもたちをすぐに確認して保護することも大きな目的の1つです。

もう1つは、子どもたちの心のカウンセリングと学校の再開です。災害にあってトラウマになっている子どもたちがとても多いのです。「災害は戦争よりも厳しい」と専門家は言います。戦争の場合は誰のせいなのかと誰かを責めることができますが、自然災害の場合は責める対象がないので、大人にとっても子どもにとっても心のトラウマが大きいのだそうです。だからカウンセリングの専門家を派遣したり養成したりします。学校の再開は子どもたちにとって、日常が戻ることで、先生に会って、仲間と会って、なぐさめあうことができるのです。

さらに、子どもたちを保護するチャイルド・フレンドリー・センターを被災地につくります。子どもはそこに駆け込めば安心して生活できます。親も子どもを連れていけば、とりあえず預けることができるという、子どもたちにフレンドリーな場所をつくることもとても大切だと思います。防災教育については、日本は先進国ですから、ユニセフも日本からいろいろなことを学び、今まで成果をあげてきたプログラムを導入し、世界の子どもたちに教えていきたいと思っています。

室 崎

どうもありがとうございました。ユニセフ協会の大使としていろいろ活動されている体験をもとにお話をいただきました。子どもを最優先に考えるということは日本でも今とても大切なことであると思います。

それでは大阪大学の渥美さん、よろしく申し上げます。



アグネス・チャン氏

## 阪神・淡路大震災の体験から子どもの防災教育の必要性を実感

渥美

10年前の今日を考えると、私自身は西宮の自宅で被災をして、神戸でボランティア活動をする過渡期にあったと思います。あの10年前の姿を見ていますから、子どもが大事だということは強く感じます。

当時は、それほど恐怖を感じていないように見えた子ども、去年この地域で地震があったときに、涙を流しながら震えていました。子どもというと、まずそのことを思い浮かべます。

それ以降、「NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク」にかかわり、各地の被災地を訪れる機会がありましたが、やはり子どもたちの姿は常に目にしてきました。見るに耐えないという言い方がいいのか、なんと声をかけたらいいのか分からないという場面がたくさんありました。

例えば、9年ぐらい前に、インドネシアで津波があったとき現地に行きましたが、子どもたちばかりが残っている村がありました。また、2003年12月26日にはイランのバムで地震が起りましたが、人口の4分の1ないしは3分の1が亡くなる中で、多くの子どもたちが亡くなりました。お墓にも案内してもらいましたが、子どものお墓は見あたりませんでした。そのような中でどういう支援ができるだろうか、何をしたらいいのかというときに、目の前の困っている子どもたちのことをまず考えたという体験があります。

子どもたちの中には、時間がたつにつれて元気になってくる子もいます。そういう子どもたちを見ると大変力強く感じますし、一緒に将来の防災について考え、次の世代に伝えていく役割を担ってほしいと思います。

一方、日本の状況に目を移しますと、子どもたちに「防災大事やろ。はよ、やりや」といってもなかなかやらないのも事実です。子どもたちが楽しみながら続けられるようにと考えて、先ほどご覧いただいた「ぼうさい探検隊」プログラムをつくりました。子どもたちに防災にかかわってもらうには、「防災の分野を勉強する」というスタンスでは受け入れられにくい。子どもたちにはいろいろな活動を通じて、地域に愛着を持ってもらうということが必要だと思って、何かいいツールはないか考えてきました。

室崎

阪神・淡路大震災などの体験をベースにして、子どもたちに対する防災教育の大切さを感じられて、楽しく長続きするようなあり方を考えておられるということです。後ほどくわしいお話をお聞きしたいと思います。

最後になりましたが吉川さん、お願いします。

## 子どもを教育することによって大人も学ぶことができる

吉川

私は元々、教育のツールを研究していて、大人の教育訓練のためにゲームを使っていました。最近、防災を勉強するようになり、特にゲームを使って防災教育を行うことを研究しています。子どもの防災教育をできるだけ自然な形で行いたい、考えながら防災について学んでもらうようなものはできないかと努力しています。

子どもを教育することによって、子どもを介して大人も学ぶことができます。子どもが大人の先生になることがあればいいなと考えて努力しているつもりです。



渥美 公秀氏



吉川 肇子氏

## 子どもは守るべき側面と担い手としての側面の2つある。

室 崎 子どもには2つの側面があると思います。1つは、保護すべき、援助すべき、あるいは教育すべき対象です。もう1つはそれだけではなく、防災の担い手として次の災害に向けて子どもたちを大きく育てなければなりません。災害が明日起きても、中学生は中学生なりに、高校生は高校生なりに、大きな力を発揮してくれるだろうと思います。

守るべき対象としての側面と、これからの防災の希望の星としての側面がありますが、いずれの場合でも子どもが強くなければなりません。自然や社会をよく理解して、正しく自然とつき合いあるいは災害に立ち向かっていく力を持たないといけないということで、多分その鍵が教育にあるということ、皆さんのお話から感じました。

### 教育の良い点・悪い点

室 崎 ではどうすれば子どもたちが災害に強くなるのか。あるいは防災の知恵を受け継いでいってくれるのか、これから議論を進めたいと思います。

吉川さん、日本の防災教育、子どもたちの教育について、良い点悪い点、あるいは日頃感じていることを紹介して下さい。

## 防災教育は地域で実施すべき

吉 川 防災教育は1つのテーマだけを行うとしても、非常に時間がかかります。私が知っている何人かの先生方は、非常に熱心に時間をかけてプログラムをつくり、教育しています。しかし、そういった防災教育を日本全国で統一的に実施しようという動きはまだ聞いていないので、今後の課題かと思います。また、教師にかかる負担など今の学校教育の現状からすると、防災教育は学校だけでやるのではなく、地域の中でやるようにできればいいと思います。

それから防災教育というと、避難訓練とかドリルのような訓練が多いようで、もちろんそういうことも大事ですし、やらなければならないのですが、もう少し状況に応じて考えるというプログラムを提供できればいいと思っています。

室 崎 子どもの考える力をどう引き出すかということですが、具体的に実践されている渥美さん、よろしくお願いたします。

## 今行っている教育が防災教育につながる

渥 美 防災教育は、1つの独立した分野としてあるわけではないと思います。いろいろな教育が防災に結びつけられると思います。今行っている教育をちょっと工夫すれば、かなり変わるという気がしています。

大阪府では、学校と地域と家庭が一緒になって「教育コミュニティ」<sup>(※)</sup>づくりをしています。この中でいろいろな行事が行われますが、それも少し視点を変えれば、防災教育になると思います。例えばフェスタが開かれます。たくさんの人が集まって、炊き出し、お好み焼きとかたこ焼きを食べます。そういう機会に防災教育ということを考えれば、願ってもないトレーニングの場になると思います。

「ぼうさい探検隊」にプラスしたいことは、先生にフォローアップしていただくことが大変重要だということです。子どもたちは地図をつくったりして、結構楽しくやっ

※教育コミュニティ

学校を核として学校と地域が協働して子どもの発達や教育のことを考え、具体的な活動を展開していく仕組みや運動のこと。

てくれます。学年によっては、その楽しさだけが残ればいいのかもかもしれませんが、ビデオにもあったように、「また後で学校で先生から聞こうね」とか、「後で先生と勉強しといてや」というように、先生方と一緒に考えていく防災教育が大事だと思います。

一見防災と関係ないようなところも探検隊は回っていますが、それも大事なことで、時間つなぎでやっているわけではありません。その地域のいろいろな人たちに出会っていくことが、防災教育なのです。地域の人たち、あるいは地域が好きになればいいのだと思います。

**室 崎** 例えば朝起きたら声をかけようとか、身の回りの草花を大切にしようとか、そういうところから防災の力は生まれてくるわけで、そういうコミュニティ、人のつながりを通して教育することが大切だということですね。

先ほど皆さんが日本の防災教育はすばらしいと言われたのですが、日本の教育レベルを自己採点するとどうですか。渥美さん、アメリカと比較してどうですか。

## アメリカと日本それぞれ良いことはまねすべき

**渥 美** 結構やっているなという面もあると思いますが、採点は難しいですね。アメリカで感じたのは、「お隣の人たちをちゃんと知っている」と子どもたちが言っていることです。子どもたちが近所を探検して、おじいちゃん、おばあちゃんを探すのです。それを聞いて、「すばらしいですね」って言うと、「これは東京から学んだのだ。東京の大空襲の前に日本がしていたじゃないか」と言われました。レベルという質問の答えにはなりません、お互いに良いところをまねすればいいと思います。

**室 崎** アグネスさんはアメリカでしばらく生活されていました。そういう体験から見て日本の防災教育はどうでしょう。

**アグネス** アメリカにはサンフランシスコに3年くらい滞在して、小さい子どももいました。滞在中に大地震を体験しましたが、その地震の後に、子どもの保育園で地震の訓練が始まりました。その前までは火事の訓練しかなかったのです。それに比べると、日本では子どもたちから大人まで、いろいろな防災グッズを用意したり、防災の日には地域で訓練に参加しようという呼びかけがあったりして、レベルが高いと思います。

アメリカにはアメリカなりの地震に対する取り組みがあって、「FEMA」(\*)という災害が起きるとすぐ発動する組織があります。地震があったときも、避難所に人が集まったのは何日かだけで、その後は何週間、あるいは一か月どこかに泊まれるだけのお金が国から出ました。それで親戚のところに行くとか、ホテルに泊まるとか、次の対策を自分で考えてやっていくということで、すごく対応が早かった。また、不安が広がらないよう、政府の車が走り回って援助物資を配ったので、買い出しに行く必要はありませんでした。

でも防災教育に関しては、日本ほど整っていないと思います。うちの子どもは今カリフォルニアの全寮制の高校にいます。今日出てくる前に子どもからメールが来ましたが、大雨で地域が浸水して泥まみれになったそうです。彼の高校はそんなに被災していないのですが、高校では生徒を毎日2時間、地域の家の泥の整理に出したそうで、それはすごくいいことだと思いました。高校生は元気だし、エネルギーがあり余っているし、いい教育になると思うのです。だからメールで「よくやったぞ。また頑張れ」と言ってやりました。

発展途上国でも教育システムが整った国でも、子どもたちに防災教育を今まであ

### ※FEMA

(Federal Emergency Management Agency) 連邦危機管理庁。ワシントンDCに本部があり、全米10ヶ所に地域事務所を配置している。災害時に被害家屋・施設の調査、電話の対応を行うなど災害の被害を最小限に抑える活動を行っている。



バダウィ・ルーバン氏とアグネス・チャン氏

まりやってこなかったことは、ユニセフとしても反省点です。ただ他のプログラムがもしかしたら将来の参考になるかと思うのでお話ししたいと思います。

例えば人身売買の多い地域では、まず地域のボランティアを養成します。そのボランティアが、知らない人には絶対ついていけないという、子どもたち向けのプログラムを学校や施設の先生に教えに行くのです。そして先生が子どもたちに教え、子どもがまた子どもに教えるという形です。これはルーマニアやモルドバで成功したプログラムです。

カンボジアでは、子どもが学校に行っていない、学校がないところも多いのですが、そういう地域では、スラム街などコミュニティの中にボランティアを何人か置きます。ボランティアはお母さんたちが一番適任です。周りの子どもたちの数を把握して、子どもたちを教えるのです。またお母さんが集まり、子どもを売ってはいけないとか議論します。そうやってお母さんたちと子どもたちの意識を高めます。

先生方から防災教育のプログラムをいただいたら、ネットワークを使って世界の子どもたちに広められたらいいなと、今日はすごく希望が見えました。

## 防災教育プログラムは各国の状況、文化的な多様性を意識しなければならない

**室 崎** 教育のプログラムを世界中に広めるというのは、すごく大切なことだと思うので、後で皆さんのご意見を聞きたいと思います。

ルーバンさんも世界中の国をご覧になっているので、他の国で防災教育がどのように行われているかという話でもいいですし、世界の国から見て日本の教育はどのように感じられるかということでも結構ですが、いかがですか。

**ルーバン** ユネスコは、教育、科学、そして文化を担当する国連の機関ですから、子どもに向けた防災教育について考えるときには、学際的な、総合的なアプローチというスタンスをとります。教育、科学、文化のそれぞれの部門のスタッフが協力して行う必要があります。したがって、ユネスコはたくさんの本を学校に提供していますが、防災はすべての教育の中で常に勘案しなければいけない問題だと考えているので、防災教育だけのテキストというのはありません。

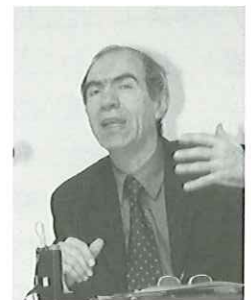
例えば、環境教育で開発を取り上げたときに、ある特定の地域に建物をたくさんつくりますが、自然災害を忘れてはいけないという形で防災を教えることが必要です。

防災は、開発の経済的な側面、例えば「消費パターン」などとも密接に関係があるということを総合的に取り上げなければいけないのです。

また、防災教育のプログラムをつくる際には、必ずその各国の状況、地元の状況を十分勘案しなければなりません。さまざまな教材、パンフレット、資料を提供しても、例えば受ける子どもたちが読み書きができないのでは役に立ちません。

さらに、防災教育プログラムは、各国の、また各コミュニティの文化的な多様性を十分意識しなければなりません。例えば日本で大切なこと、受け入れられることが、ジンバブエやチリ、その他の国では当てはまらないこともあるわけです。したがって文化的な多様性への配慮も防災教育プログラムでは必要となります。

兵庫県の舞子高校はネパールの学校と姉妹校提携をしていますが、お互いの文化的状況に合わせてやっています。カトマンズの学校の生徒は、神戸の大震災の教訓を生かしますが、それを100パーセントまねしているわけではありません。このような姉妹校関係を日本と諸外国が結べば協力の枠は広がります。



バダウィ・ルーバン氏

室 崎 ルーバンさんから議論の題材になる話を2つ提起していただいたように思います。1つは総合的に教育をしなければいけないという教育の仕方、プログラムの中身の話です。それから国際的な視点からの防災教育のあり方や支援の仕方という問題。この2つについて議論をしたいと思います。

まず教育の仕方についてですが、吉川さんは「クロスロード」という教育ツールを考えておられるので、そのご紹介をお願いしたいと思います。



渥美 公秀氏と吉川 肇子氏

## あらゆる機会にいろいろな教育ツールで学ぶ機会を

吉 川 「クロスロード」というのは「分かれ道」という意味ですが、質問に対してイエス、ノーで答えるゲームです。神戸の震災体験を皆さんに知っていただくというカードゲームで、カードには震災時の状況が書いてあります。

例えば、「あなたは食料担当の市の職員であると考えて下さい。被災から数時間たって避難所には3,000人の人がいます。でもお弁当は2,000食しか用意できていません。配りますか、配りませんか」ということを、イエスかノーで答えるという質問です。

アグネスさんならどうされますか。配りますか。配りませんか。

アグネス 配ります。まず子どもと老人の方に。そして次は女の人に。男の人は最後に回して配ります（笑）。

吉 川 でも男の人もお腹がすいているかもしれません。それでは不公平かもしれません。

アグネス 大丈夫。男の人は長持ちします（笑）。

吉 川 というような形で議論をする素材として考えたものです。これをつくったことで発見したことがありました。それはいろいろ話し合っ、いろいろな視点が出てくるということです。それからもう1つは、話し合っている間に起こることは、例えば私が男性だったら、「女の人に分けて下さいと言います」というように、皆さんがそれぞれ自分の立場や役割を想像して、意見を言われることでした。このようにしてさまざまな状況でどう考えるか、災害が起こる前に話し合っいただくことによって、いろいろな見方や考え方があることがわかります。本当に災害が起こったときにどうするのか、あらかじめ考える素材としてつくったのが「クロスロード」です。

震災の1つの体験をとっても、勉強の仕方、教育の仕方はいろいろあると思います。もちろん現地を見に行くことも大事ですし、被災された方の体験を聞くことも大事だと思います。また、例えば物語にして長く語り継ぐということもあり得ると思います。リーフレットやパンフレットで学ぶということもあると思います。博物館もあるかもしれません。そして私たちがつくったようなゲームもあるかもしれません。

強調したいことは、どれか1つが適当だということではなくて、あらゆる機会を捉えているいろいろなツールでみんなが学ぶことができるようにしたいと考えています。

室 崎 「クロスロード」は子どもにとっても有効でしょうか。

吉 川 最初は大人向けと考えていたのですが、学校の先生からこれを子ども向けにしてほしいという要望があって、今その作業は進行中です。ですから子どもにもできるものを考えています。

室 崎 いろいろな役割を演じることは、他の人のことを考える、思いやることで、防災には大切な要素だと思います。それから災害がどのように推移していくのかイメー



ディスカッションに熱心に耳を傾ける参加者の皆さん



ジすることも必要です。そういうイメージ力や思いやる力をゲームによって養えるので、ぜひ小学生版や中学生版をつくっていただきたいですね。

吉川 これはイエスかノーかを選ばなければならないので、一種のジレンマなのです。ですから子どものジレンマはどういうことかを考えます。例えば大事にしているペットを避難所に連れていきますか、どうしますかというような質問が考えられると思います。

室崎 渥美さん、今の吉川さんのお話に加えて、教育の方法として何が大切でしょうか。「ぼうさい探検隊」がすばらしいということは分かりましたが、それ以外にもありましたら教えて下さい。

## 防災には抽象的に考える人と具体的に活動できる人が必要

渥美 吉川さんが言われましたが、あらゆる機会を捉えることが大切だと思います。新潟県中越地震の救援に我々の団体もかかわっているのですが、大阪大学の学生が次から次へとたくさん行って来ています。その学生たちに言うのは、なぜ行けるのかということです。

それは寄付をいただいたからですが、寄付には一人一人の思いが込められていて、自分が行けないけれどもこのお金で行ってほしいと思って寄付して下さった。そういう気持を考えないといけないということを学生に言うと、1回現場を見てきた学生は、大変理解できると言います。そういうことにピンと来てくれれば、ことさら防災という言葉を使わなくても、結果として防災につながっていくのではないかなという気がします。

室崎 現場を知るということはすごく大切だと思います。でも現場に行かなければ知ることができないのかというと、そういうことでもないですね。

先ほどアグネスさんが言われたように、世界で飢餓や水がないために亡くなっている子どもたちがたくさんいるという現実は、いろいろな形で知ることができるし、それを伝えなければいけないわけですね。

渥美 そのときにルーバンさんが言われた文化的な背景をきちんと踏まえておけば、次から次へ連鎖していくと思います。

例えば文化に沿ってということだと、大阪でしたら「お笑い防災」というように、自分たちが日常的にやっていることを防災に近づけていって、堅い防災を気楽に体で覚えていくようにします。防災に必要なのは、そういうことを抽象的に考えられる人と、具体的に現場に行く人の両方がいないといけないと感じています。

室崎 ルーバンさん、何か今の話でご意見はありますか。

## 防災には長期的な目標も必要

ルーバン 私が強調したいのは、防災活動では長期的な目標を考える必要があるということです。

例えば、チリのアントファガスターという町のプログラムですが、そこでは、災害が起こったらどう行動するかということを教えるだけではありません。それは防災のサイクルの一部で、長期的には被害削減、低減の方法が重要です。

災害は地域によって、例えば地震の可能性が高いところ、暴風雨が起こりやすいところ、あるいは森林火災が起こりやすいところというように地域差があります。ですから実際にプログラムを提供する場合、子どもたちが自分が生活している環境

でのリスクを十分に理解できるようにする必要があります。その地域で一番最優先される災害は何か、そしてこの災害にどう対応していくかを考えます。例えば、地域社会の土地利用について考えます。あるいはどうすれば自分たちの学校を災害によりよく対応できる形にできるか、具体的に考えます。

防災全体のプロセスは、単に災害が起こったときにどう行動するか、どう避難するかという問題だけではありません。災害を予測して、起こったときに対応の責任を持つためには、自分の立場としてどうするのか、そういったことを考えてプロテクションのシステムを考えなければいけないのです。

室 崎

防災のサイクルというのがあります。予測される南海地震に備えて今私たちが始めることは、まずどこが危険かを知ることです。次に危険なところをより安全にする方法を考えて実施します。例えば家の修理をしたり、家具の転倒防止を図ったりと、被害を軽減する取り組みを事前にします。それから避難訓練などをします。そして災害が起きたら救助救援活動をし、復旧、復興をするというサイクルがあります。

このサイクルのそれぞれに知恵や技術が必要ですが、そういうものを防災力としてしっかり伝えていかなければならないということをしてルバンさんは言われたと思います。

アグネスさん、教育のあり方などで何かお気づきのことはありますか。

## 教育プログラムをしっかりと実施する枠組みが大切

アグネス

教育プログラムをしっかりと実施していく枠組みが大切だと思います。それには予算も必要だし、地域の理解も必要ですが、そういう枠組みをまずつくらなければいけません。

最初にやらなければいけないことは、政府を説得することです。なぜこのプログラムが必要なのかを説得します。次のステップは、地域ごとの専門家の養成です。教えられる人たちがいなければ、いくらいいプログラムでも効果がありません。専門家をたくさん養成するには予算が必要ですが、それをユニセフが出すのか、政府が出すのか、そういうやり取りがあるわけです。こういう現実的な問題を解決するために、政府を説得することは非常に重要です。

たくさんの専門家は一度に養成できませんから、ピラミッド型の養成をします。1人の専門家、ボランティアができれば、この人は少しだけ給料をもらえるようにします。その次には、例えば地域の学校の中で必ず1人先生を出してもらって、そのプログラムを学習してもらいます。その先生が学習したら自分の学校へ帰って、さらに他の先生を3人なり、4人なり、養成します。その後子どもたちのリーダーをつくります。そしてその子どもたちが実際に子どもたちに教えていく。こういう枠組みをつくらないと、どんなにすばらしいプログラムがあっても広まらないということを、いろいろな国で痛感しているのです。

教育には、学校や教材が必要と考えがちですが、教える人と教わる人がいれば、もう教育ですね。だから教育プログラムでは教える人を確保することが第一歩です。

「クロスロード」も「ぼうさい探検隊」も私はやってみたいと思います。そうすれば私も他の人に教えられるかもしれません。だから特別な人が防災教育の専門家になるのではなくて、体験したら次の人に教えていけるという意気込み、私たちは防災大国になるのだ、また世界中に広めていくのだという意気込みがあればできると思います。すごい社会貢献、世界貢献になると思います。



それぞれの立場から熱心な発言が続いた

日本はいろいろなタイプの災害体験を持っているから、こうしたプログラムをぜひ広めてもらいたいと思います。

室 崎 渥美さんは、「ボランティアリーダー」をつくっていく努力をされていると思うのですが、何か教育プログラムを実施していく枠組みについてご意見ありますか。

渥 美 まさに言われるとおりで、次から次へ広がっていくようにしたいのですが、なかなか難しいのが状況です。

室 崎 日本では小学校や中学校の先生がどうやって防災教育をしているのか、先生向けの教育プログラムはあるのですか。

渥 美 先生に向けたプログラムについては聞いたことがあります。ただ先生たちは単元という形で日々の教育活動をしていますから、それに合わせてプログラムをつくらないと受け入れてもらうのは難しいと思います。

室 崎 日本では阪神・淡路大震災後に、多くの防災のアイデアが出てきていますが、それをつないで1つの枠組みにすれば世界に発信できるかもしれないと思うので、すごく大切なことだと思います。

では残った時間で、国際支援、国際的なプログラムづくりでご提案があればいただきたいと思います。ルーバンさん、日本に期待することはありますか。

## 津波警報システムを理解する教育が必要

ルーバン 今回のインド洋津波のあと、いろいろな形で取り組みが始まっています。例えば、国際社会がインド洋沿岸諸国に手を差し伸べて、津波の早期警報システムをつくらうと、この国連防災世界会議で呼びかけられています。既にある太平洋津波警報センターのインド洋版です。

ユネスコは40年間、太平洋での津波警報システムをサポートしてきました。その際には日本の支援をいただきました。こうしたシステムはインド洋だけでなく、地中海でも必要ですし、カリブ海諸国でも必要です。

ここで核になるのはやはり教育です。というのは、太平洋津波警報システムをそのままインド洋に設置しても意味がありません。設置するならば、まずその地元の特徴、文化を勘案して、その地域の人々にこの警報システムをどのように使うのかということ学んでもらうことが必要です。

また、せっかくシステムがあっても、沿岸の住民にその警報を受け取る施設がなければ意味がありません。日本では拡声器で津波警報を伝えますが、インド洋沿岸には電気がないので放送システムも使えないところがあります。せっかく警報を受け取っても、その警報を地元の住民や学校に伝える手段がありません。ですから、地元の対応、防災意識を高める教育が必要なのです。

専門家は、電気が使えない地域には、例えば飛行機を海岸沿いに飛ばして信号を送るとか、その地域にふさわしい、新しい考え方を工夫しなければいけないと言います。そうしないとこのシステムが実際に使われ、防災に役立てられないと思います。



当日は満席となった会場

## 教育と地域の実情に応じたシステムの重要性

室 崎 2つ大切なことを言われたと思います。1つは津波警報のシステムをつくっても、教育ができていないと情報をしっかり受け止めることができずうまく働かないことがあります。最近日本で同じことが起きました。去年の9月、和歌山で大きな地震があり、津波警報が出ているのに、市民は逃げませんでした。これは教育の問題で、システムがあっても教育されていないと、しっかり受け止めることができないという一例です。

2つ目は、それぞれの地域の実情に応じた形でシステムをつくらないと、そのまま日本の技術を持っていっても役に立たないということです。台湾で地震があったときに、日本の仮設住宅を持っていこうという話がありましたが、台湾の人は、台湾にはいっぱい家をつくる人がいるから、建てるお金さえくれば、家は持ってこないでいいと言っていました。その国にとってどういうやり方があるのか、家のつくり方もいろいろあるし、そういうことを考えなければいけない。それぞれの地域の実情を考えなければいけないという、非常に大切な指摘だと思います。

吉川さん、国際的なレベルの教育ということで何かご意見がありますか。

吉 川 私自身は海外というと東南アジアしか知りませんが、教育プログラムづくりでも、その地域の人に主体的に関与していただかないとだめですし、地域の特性を教えていただかないことには、教育プログラムづくりもできません。これは日本の国内でも大事だと思いました。

室 崎 渥美さん、今までのお話を聞かれてどうでしょうか。

## 津波から逃げる仕掛けが必要

渥 美 和歌山で地震が起き、津波警報が出ても誰も避難しなかったことは、教育のせいだと考えがちですが、ちょっと違うような気がします。「津波警報が出てるから、はよ逃げろ」と言っても逃げないことを、僕らはもっと真摯に受け止めるべきで、逃げたくなるような仕掛けをつくらなければいけないと思います。

室 崎 津波が来るとどういうことになるかということが、正しく理解されていないと思うのです。

渥 美 それもありますが、例えば、あるファミリーレストランでは、お客の回転率を上げるために、店内滞在は20分までにして下さいとは言えないので、わざとイスを堅くしてあります。仕掛けと言ったのは、そういうレベルで考える必要があるということです。それはやはり文化、宗教などいろいろなものが絡むでしょう。そういうことをゆっくりと話し合う場を、国連などでつくってみんなで考えていかないといけないと思っています。

室 崎 「ぼうさい探検隊」を世界中でやってほしいと私は発言したのですが、そういう考え方はどうでしょうか。

渥 美 それはぜひやってもらいたいと思います。

室 崎 津波の情報システムのようにすぐお金のかかるシステムで援助することも必要ですが、日本の防災教育をルーバンさんが言われたように、相手のことをよく考えながら広めていく大きなプロジェクトがあってもいいと思うのです。

渥 美 あっていいと思います。それでそのことから日本も学び得ることがいっぱいあると思います。

## 日本がリーダーシップをとって防災の国際組織を作ってほしい

アグネス | 私の夢ですが、日本に防災の国際本部をつくります。最初は小さくなくていいのです。日本のいろいろな専門家を集めて、まずセンターをつくるのです。他の国の知恵が必要なときにはその知恵を借りる。いろいろな専門家が登録をしていて、例えば大きな災害があったときには、リーダーシップをとってすぐ出動できる、そのような組織をつくってほしいと思うのです。

日本だったらその活動資金はODAの中から少し出したり、いろいろな寄付を少し集めたりすれば、すぐにできると思います。「防災のインフラストラクチャー」をつくるのも大切ですが、一番重要なのは何かというと、やはり人材です。ソフトです。それを形にしていくのが、一番の世界への貢献だと思うのです。

昨日、天皇陛下もおっしゃったことですが、今まで体験した悲しいたくさん思い出をむだにしないで、世界貢献にしていってほしいと思います。形にするためには、たくさんの人たちの決心と意識が必要です。そして行政の了解も必要ですが、私は日本だったらできると思うのです。「私たちが中心になって、責任を持ってやっていますよ」と世界に呼びかける。それは日本人の意識を高めるためにもすごくいいことだし、世界の子どもたち、あるいは世界の人々にとってとても心強い組織になると思うのです。

これができたら、阪神・淡路大震災で10年前に被災した人たち、新潟で亡くなった方、あるいは遠い昔、関東大震災で亡くなった方も含めて、魂が救われるのではないかと思います。だからぜひ日本を中心とした防災の国際団体をつくりたいと思います。ぜひよろしくをお願いします。

### 終わりに

室 崎 | どうもありがとうございました。アグネスさんが最後にすごくいいまとめをしてくれました。私は、今日の議論をこのままの形で終わらせたくないと思っています。もしできれば教育を中心にした、あるいは子どもを中心にした、1つの国際的な組織なりプログラムを神戸から、日本から、ぜひ具体化していきたいと思います。会場に来られているいろいろな立場の方々のご支援もいただきたいということを申し上げて、閉会のまとめにさせていただきたいと思います。長時間ご清聴、本当にありがとうございました。

熱気あふれる中、パネルディスカッションは終了した



## 閉会挨拶

朝日新聞大阪本社編集局長

田仲 拓二

長時間お聞きいただき、ありがとうございました。とても素敵なこのパネルディスカッションを開いていただいた皆さんに、本当に深く感謝を申し上げたいと思います。非常に貴重なご提言をしていただいたコーディネーターの室崎先生をはじめ、パネリストの皆さん、本当にありがとうございました。

朝日新聞は、今回この阪神・淡路大震災から10年という節目にあたり、どういうイベントにご協力できるだろうかと考えてきました。幾つかお申し出もありましたし、既に1月17日を前に、この神戸の地で震災関係のシンポジウムも開きましたが、今日のこのフォーラムを大変楽しみに、大切にしてきました。といたしますのは、ちょうどこの折り、この会場で国連による防災世界会議が開かれております。私たちはこの神戸の地からどういうメッセージを出していくのか、誰に対してこの神戸、阪神・淡路大震災の体験をゆだねていくのかを考えた場合、やはり未来を担う子どもたちであろうと思います。その子どもたちが主役になってこの防災マップをつくるための「ぼうさい探検隊」の活動を全国津々浦々で繰り広げ、見事な作品を発表してくれています。ぜひもう1度お帰りになる際に、入り口に飾ってあります作品を見ていただきたいと思います。

実を言いますと、年末に朝日新聞の紙面に掲載する折りに見させていただいて感心しました。感心したというのは2つあります。私たちジャーナリストは現場に出かけて自分の足で歩き、自分の目で見、自分の耳で人の話を聞くことが基本ですが、この防災マップをつくる「ぼうさい探検隊」の子どもたちは、それを見事に実践しております。大人の目ではなく、子どもの視点で非常に斬新で、しかも楽しいマップをつくっています。

それともう1つうれしかったのは、この子どもたちが自分の住んでいるまち、地域を非常に誇りに思い、深い愛着心を持っていることが伝わってきたことです。これはとても素敵なことで、この国、この社会の行く末を考えると、随分希望が持てると思えました。こういうことを私ども朝日新聞と一緒に支えていけることを本当にうれしく思います。

今回の企画は日本損害保険協会、ならびにユネスコ、日本災害救援ボランティアネットワークの方々と共同でつくりあげたものです。こういう機会をいただいたことを関係者のみなさまに改めて御礼申し上げます。この催しをこれからも続けていくことが私どもの使命の1つであると思っています。次の機会にはもっとたくさん子どもたちに参加してもらい、もっと創意工夫のあふれたマップができることを願っております。

最後になりますけれども、今日のこの素敵なシンポジウムの様子については、1月25日の朝日新聞の朝刊で紹介させていただきます。お読みいただければと思います。本日は本当にありがとうございました。

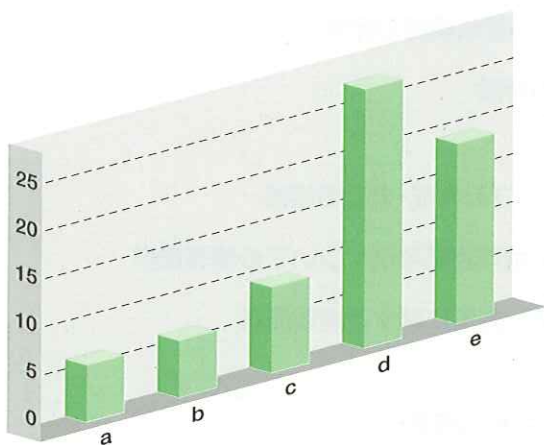
# アンケート結果 (概要)

●参加人数:314人 ●アンケート回収数:66枚 ●回収率:21.0%

●回答者所属 教育関係者 9.1% 消防・警察関係者 9.1%  
 学 生 6.1% 行政関係者 7.6%  
 損保関係者 24.2% その他(自治会等) 43.9%

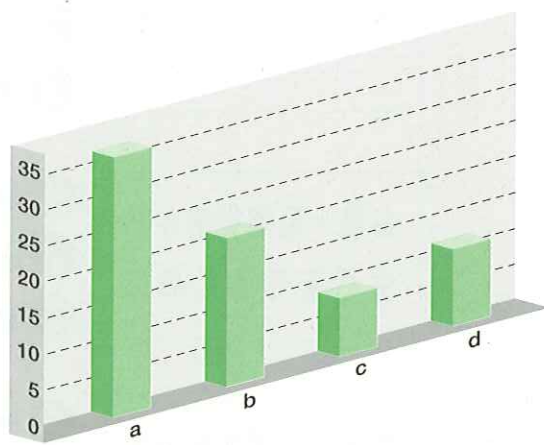
## Q1 今回のフォーラムを何でお知りになりましたか? (複数回答)

- a. 当協会のホームページ……………6名
  - b. チラシ……………6名
  - c. 知人の紹介……………9名
  - d. 新聞・雑誌……………27名
  - e. その他……………19名
- (神戸市広報 等)



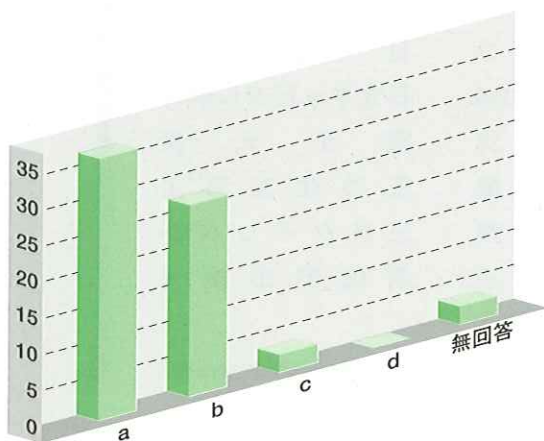
## Q2 今回のフォーラムに参加された動機(理由)をお聞かせ下さい。(複数回答)

- a. 防災教育に興味があった……………36名
  - b. テーマに興味があった……………21名
  - c. 出席者に興味があった……………8名
  - d. その他……………11名
- (今後の参考 等)



## Q3 今回のフォーラムの感想はいかがですか?

- a. 大変興味深かった……………36名
- b. 期待どおりであった……………26名
- c. やや期待はずれであった……………2名
- d. 期待はずれであった……………0名
- 無回答……………2名



### ■a、bの主な理由

- 子どもたちが主体で防災を考えたこと。地域を動かしていること。
- 防災教育のあり方についていろいろな視点で考えるチャンスを与えてくれた。
- 「ぼうさい探検隊」は損保業界の行事として大変有意義だと感じた。さらに推進してほしい。
- フォーラム構成のバランスがよく、3部とも内容がとて充実していた。
- パネルディスカッションでは、司会進行が良く各パネリストの特性・持ち味を良く引き出していた。
- 多くの新しい問題意識と広い知識が得られ、今後の地域活動に生かしたい。
- 今後それぞれの地域で実施する防災教育、防災訓練のヒントが得られた 等

### ■cの主な理由

- もう少し具体的な内容を聞きたかった。

# 日本損害保険協会の安全・防災事業の主な10項目

安全・安心な社会をめざして

「台風」「豪雨」「地震」「噴火」…わが国に暮らす以上、避けられないリスクがあります。また、技術の進歩、人口構造や経済活動の変化等によって、新たなリスクが生じたり、巨大化・複雑化しているリスクもあります。こうした中、日本損害保険協会では、災害や事故から国民の生活を守り、安全で安心な社会をめざして、様々な活動を行っています。

地域の防災力を  
高めるために

- ① 実践的防災教育プログラム「ぼうさい探検隊」の実施
- ② 「奥さま防災博士」の活動支援
- ③ 地域防災リーダー養成講座の実施
- ④ 消防自動車等の寄贈

台風・豪雨災害から  
生活を守るために

- ⑤ 洪水ハザードマップの作成・普及の推進
- ⑥ 水害時の企業の地域貢献事例についての情報提供
- ⑦ 住宅の風災害防止対策に関する情報提供

事故や災害を知って  
備えてもらうために

- ⑧ 防災シンポジウム等の開催
- ⑨ 防火標語の募集・防火ポスターの制作
- ⑩ 総合安全防災誌「予防時報」の発行

## 社団法人 日本損害保険協会 会員会社一覧

あいおい損保	損保ジャパン	日本地震
朝日火災	そんぽ24	日立キャピタル損保
共栄火災	大同火災	富士火災
ジェイアイ	東京海上日動	三井住友海上
スミセイ損保	トーア再保険	三井ダイレクト
セコム損害保険	日新火災	明治安田損保
セゾン自動車火災	ニッセイ同和損保	
ソニー損保	日本興亜損保	

(2005年4月1日現在 50音順)



## 「ぼうさい探検隊」とは

## 1 趣旨

小学生向け実践的防災教育プログラム「ぼうさい探検隊」は、人と人とのつながりを大切にする気持ちを育むとともに、まちへの関心を高めることを通じて、子どもたちに防災意識が芽生えることをねらいとしたプログラムです。このプログラムのキーワードは、「防災とは言わない防災」です。子どもたち自身が、楽しみながらまちを探検していくことを通じて、知らず知らずのうちに、まちが好きになり、まちの安心・安全への関心を高め、ひいては防災意識の芽生えにつながる…… そんな願いが、この「ぼうさい探検隊活動」には込められています。

## 2 活動の内容

小学生を対象に、グループごとに自分たちが住んでいるまちを探検してもらい「どんな場所が危ないか」「消火器や防火水槽、防災備蓄倉庫がどんな場所に設置されているか」などを実際に見て回り、探検の結果を防災マップにまとめて、ふりかえるという教育プログラムです。

まさに「探検隊」の気分で、楽しみながら知らず知らずのうちに自分のまちの危険とその備えについての知識が身につくというものです。探検の中でまちに住む人たちや消防署、交番でインタビューもして、防災や防犯に関する質問に答えてもらうなど、地元の人々との世代間交流もして、「きずな」を深めることもこの活動のポイントです。

## 3 ぼうさい探検隊の手順

## (1) まちなか探検



子どもたちが、グループ単位でまちを歩いて防災や防犯に関する様々な施設や設備をチェックします。

## (2) 防災マップの作成



発見した消火器や防火水槽などの位置や写真、気づいたことなどを模造紙上の地図にまとめてオリジナルの防災マップを作成します。

## (3) 発表



グループごとにまちの危険なところや気づいたことなどを発表し合い、あらためて活動を振り返り、防災・防犯意識を高めていきます。

※「ぼうさい探検隊」活動は、プログラム説明のほか、まちなか探検（60～90分程度）、マップ作成（60～90分程度）、マップ発表（60分程度）など約4時間程度（半日）で実施することが可能です。

なお、実施に当たっては事前に子どもたちへ防災や防犯についての事前学習を行っておくとより効果的です。

## 4 ぼうさい探検隊活動を実施して

これまでこの活動に参加した学校関係者やボランティアの方々からも、「子どもたちが本当に楽しそうにいきいきと探検していた。貴重な経験をさせてあげることができた」「子どもたちが探検活動を通じて、知らず知らずのうちに人と人とのつながりの大切さに気づいていた。まちへの愛着を持つことで防災意識が高まるというねらいどおりの充実した授業となった」「NPOと学校の連携による教育活動の好取組み例になった」など大きな反響が寄せられています。

また、各地での「ぼうさい探検隊」活動は、新聞、テレビ等マスコミでも大きく取り上げられています。

損保協会では、全国の小学校、自治会、子ども会等に「ぼうさい探検隊活動」の実施を呼びかけています。

国連防災世界会議参画イベント

# ぼうさい探検隊フォーラム 報告書

～ 防災教育のあり方を考える～

2005年4月発行

社団法人 **日本損害保険協会**

生活サービス部 NPO・防災グループ

〒101-8335 東京都千代田区神田淡路町2-9

TEL. 03-3255-1294

URL. <http://www.sonpo.or.jp>



## 社団法人 日本損害保険協会

〒101-8335 東京都千代田区神田淡路町2-9  
TEL. 03-3255-1294  
URL. <http://www.sonpo.or.jp>

損害保険に関することはお気軽に次のフリーダイヤル  
(電話料金無料)へご相談ください。

日本損害保険協会  
そんがいほけん相談室  **0120-107808**

受付時間：午前9時00分～午後6時00分(月～金曜日、祝祭日を除く)



くるまから離れるときは必ずキーを  
抜きドアをロックしましょう。  
イモビライザーは、とても効果的な  
盗難防止装置です。



かけがえない環境と  
安心を守るために  
(社)日本損害保険協会は  
ISO14001を認証取得しました。



古紙配合率100%再生紙を  
使用しています。



印刷には大豆油インクを  
使用しています。